

10 総括

平勢 隆郎

○平勢 本日は、少し文献を絡めて総括せよということでしたので、少しばかり用意したものを画面共有いたします。

飯島先生から始まり、焦南峰先生、梁雲先生、そして、諸先生方の発表を伺い、更めて最前線でご活躍の方々のご見解に接するのはいいものだなと思いました。以下、繰り返してコメントすることは避け、こういう点は皆さんおっしゃらないだろうなというようなところを申し上げて、総括に替えたいと思います。

『史記』の中に「封禪書」があります。いにしへの帝王、それから、秦の諸「時」、孔子が絡んだ話、それから、始皇帝の封禪という具合に並んでいます。本日のご発表もいろんなところで関わっていますので、これを最初に申し上げました。諸「時」——「時」は祭祀に関わる場です。皇帝陵、王、秦の王陵、周の王陵、全て祭祀に関わるわけです。

それから次に、これはわれわれが何気なく使う資料ですけれども、『史記』と『漢書』があります。それらがどんな体裁で書いてあるかです。関心をむけているようできて、忘れていることもままありそうですので、これをお示しました。

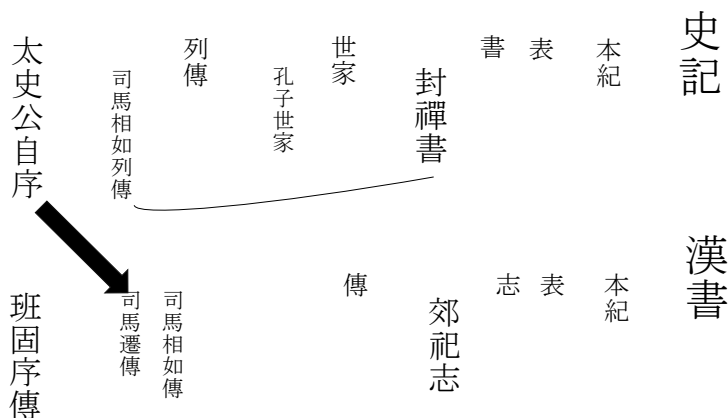


図1

『漢書』は二十四史の中で、誰もがこれは正史だと認めているわけですが、ある考え方によると、『史記』というのは、私の書だというふうな言い方をされます。それは、どういうところから来るかというと、体裁の取り違いです。簡単に言うと、『漢書』の体裁で、『史記』を語ると私の書になるという話です。史書を利用するには、史書のもつ体裁も理解しておいた方がいいという話題です。体裁自体は『史記』も『漢書』も基本的に同じなので、これは両方とも正史でもいいわけですが、体裁上『史記』の太史公自序にあたる部分は、『漢書』では班固の序伝の部分になります。ところが、『史記』と『漢書』は武帝までは同じ内容を記すところがあって、『史記』の太史公自序の内容が『漢書』では司馬遷伝に押し込められています。『漢書』では、史書としての「公」の立場は班固の序伝に示され、司馬遷伝は史書としては私人の伝になります。だから、『漢書』を読むと、『史記』が「私」の書だと自然に気づかされるのです。そうしくまれています。史書の利用に当たり、「私」の意見のように扱って、足をすくわれないように、というお話でした。ついでに言えば、実は書いてある内容も違っていたりします。足して話題を語ると、『史記』でも『漢書』でもないような中途半端な話になっていることがあります。意識してお使いになることをお勧めします。

それから、「孔子世家」の中に『春秋』とその伝の記載があります。春秋の伝である左氏伝の中に秦国の情報がだいたい詰まっていて、それを利用しています。『史記』の最後に（太史公）自序があって、中に『史書』のことが書いてあります。そして「孔子世家」の中に『春秋』のことが書いてあります。『春秋』は「私の書」扱いなんですね。これも意識してお使いになるといいと思います。

少し余計なことを付け足しますと、「孔子世家」の「世家」は、本紀と伝の中間の扱いです（諸侯を扱う）。この『史記』特有の扱いは、『漢書』以後ありません。『漢書』以後の基準なら「私」ですが、言わば、「半公」です。さらに言えば、孔子は本来「伝」で扱う人物なのに、一階級特進して「世家」で扱っています。「半私」と表現した方がいいかもしれません。

それから、『史記』「封禪書」に先ほどのお話ししたようなことが書いてあります。その「封禪書」の前の時代の、先行する内容が、実は「司馬相如伝」に書いてあります。この先行内容は『史記』としては「私」扱いです。「封禪書」は『史記』の「書」の一つですから、「公」扱いということになります。この「封禪書」が『漢書』の体裁では「郊祀志」になります。なぜ「封禪書」なのか、なぜ「郊祀志」になるのか、今日はご説明する時間はありませんが、こんな体裁になっている歴史書を使って、われわれは秦国の歴史を繙いていくということになります。

太史公自序から何が分かるか。太史公自序は、周の宣王のときに、司馬氏がこ

うであったというところから書き始めます。司馬氏がとにかく歴史書を書く、その役目に当たるのだということが最初に書いてあって。これが太史公自序という形になるわけです。その中に『史記』編纂者による評定があります。本紀や世家について評価が書いてあります。これは、私自身は自著の中で説明したことがありますが、原文を見れば分かりますので、皆さん、実際お確かめになってください。私の説明で恐縮ですが、これは悪いよというのは、自序を読めばすぐ分かります。五帝（伝説五帝）、三代（夏殷周）、三代（秦・秦始皇・項羽）、五帝（漢皇帝本紀）の大枠としての評定と個々の本紀の評定を組み合わせます。それで、いい悪いというのを「○×」で示しました。この本紀は「○○」、別の本紀は「○×」という具合です。こう評価すると「○○」になるのは、夏本紀、周本紀、そして漢の高祖と文帝と武帝それぞれの本紀だけになります。他は、どこかしら「○」や「×」が混じります。

ここで何が言いたいかというと、秦国の歴史というものの自体は、三代から後になるわけですね。では、五帝や三代の詳しい歴史が分かるかということ、これは一般には分かりません。『史記』という書物ではそうになっています。さらに言えば、秦は『史記』にとって、批判の対象になります。記述がない、わからない、批判の対象。理解しておきたいことです。

秦の諸時が「封禪書」に書いてあります。「時」というのは、儀礼を行う場所です。ところが、この「時」をまとめる部分の半分は、伝説の時代で、やっと周の話になって、しかも、非常に簡単な記述しかない。その後、東遷以後のこと

封禪書と秦の諸時 左が古い

始皇帝東遊海上、行禮祠名山大川及八神、求僊人羨門之屬
東遼郡縣、祠騶繅山、頌秦功業、徵從齊魯之儒生七十
人、始皇開此義各乖異、難施用、由此細儒生、而遂除車
上秦山陽至嶺、立石頌始皇功德、明秦得封也、而遂除車
禪于梁父、秦禮備采太祝之祀雍上帝所用、而不得時記也、始
皇之上秦山、中阪遇暴風雨、休於大樹下、諸儒生既細、不得
與用於封事之禮、開始遇暴風雨、即識之

始皇帝の封禪

孔子譏之 封禪

或曰、宋太丘社亡、而鼎沒于泗水彭城下
襄弘以方事周靈王、晉人執殺襄弘
及後陪臣執政、季氏旅於泰山、孔子譏之
爰周德之治維成王、成王之封禪即近之矣

齊桓公既霸欲封禪乃止

秦の諸時

四瀋視諸侯、諸侯祭其疆內名山大川、四瀋者江河淮濟也

周 天子明堂辟雍、諸侯泮宮

山嶽祭祀・夏社

古の帝王の封禪なし

があって、秦の襄公の話が出てきます。その中に、「時」が出てきます。六時のことがあります。それ以外に既に廃れてしまっている時があるよと書いてあります。「時」の記述は、考古遺物としては、春秋末の晋国の侯馬盟書があります。「定宮平時」という記述があります。ですから、秦だけでなく、それぞれの国に「時」と称する場があったことが分かります。

この時で行われた具体的儀礼は、よく分かりませんが、神祭りの何かなんだろうとは言えるでしょう。単に儀礼の場だと言っているにすぎませんが。本日、角道さんが雍城遺跡のことを発表され、その中で、雍城の高い場所に何か作られている、それは漢代になるまでずっと使われ続けたようだと紹介されました。たぶんそれに関わる話だろうと思います。だから、儀礼の中身は分からないけれども、実際に現地に行って、こうではないか、ああではないかと考えていると、どうやらこのような祭祀場という見方で、より具体的に検討できることが分かります。

前9世紀から後は、秦国の記述もだんだん具体的になるわけですが、ここには具体的な説明はいたしません。本日、飯島先生をはじめ、何人かの先生方から、具体的なご説明もいただきましたので、それは繰り返さないことにいたします。

文献資料でも、具体的分析はできなくはないけれども、やはり痒いところに手が届かないところがあります。そこを本日の先生がたのお話を伺うと、痒いところにまだ手が届いたと断言できないような感じもないわけではないが、それでも随分と近づいたような気になります。とてもいい発表を伺ったなという気がいたします。

次に、これは時々使う写真ですけど、編鐘ですよ【写真割愛】。編鐘は、大小配列します。その大小の縮小の変化が、並べて見た目に直線的に見える場合と、曲線的に見える場合があります。春秋中期に直線的なのが出現します。変化が曲線的になるのは前5世紀前434年の紀年銘の鐘を出土した曾侯乙墓のころです。このうち並べて見た目に直線的に見える編鐘を拝見しました。山東大学の中です。

それから、実は上記の編鐘等を見たついでに、別のところで遺物を拝見しました。その中に倣製陶器があったんです。それはその時点で戦国後期と判断された特徴的なマーク（獣面鋪首）がついてました。案内者はそれが時期判定の根拠になると言っていました。慎重を期するなら、やや幅をもたせて検討されるマークですが、晋の趙卿墓（前426年趙襄子死去）を参照しても、上記の曾侯乙墓のころ以後を問題にします。マークなしということだと、西周時代の青銅器に似た形のものが出ています。明らかに形としては継承している。ただ、それが倣製陶器という形で出てくる。その問題を大日方さんに、倣製器として今日扱っていただ

きました。西周から秦への変化をそれで考察されたと思います（私が個人的に撮りためた写真などを整理していると、過去に上記のマークを春秋時代と判断している場合もあるようで、再整理も必要かと思います）。

それから、元へ戻りますけれども、焦南峰先生の今日ご紹介くださった漢代の帝陵というのは、先ほどご紹介した「封禪書」に書かれたことを考えるのにも非常に有用です。それだけでなく、そこから派生するいろんな問題があります。とりわけ、同じような形をまねていくという、やっかいな問題がここにもあります。考古学では通常はモノの形の変化を追いますので、変化しないというやっかいな問題です。私は考古学を専門にしているわけではありません。日本国内の考古発掘に参加したり、80年代に所属した大学の構内遺跡を調査し簡単な報告書を出したり、などの経験はありましたが、慎重に対処してきました。そうした立場からすると、本日もいろいろ考えられるということを伺い、それなりに説得力がありそうだと思います。ただ、山東省で得られる時代感と、陝西省で得られる時代感がずれてしまっていかどうかは、もう少し検討の余地があるかなと感じます。

その他、文献では分からない世界ということであると、曹龍先生の牛のお話ですとか、菊地先生のDNA、その他の知見を集めたお話も聞くことができました。

それから、最後に牛に関しての質問など、脇で見ているものが「おっ」と思うような答えがどんどん出てきて、これも興味深く拝聴いたしました。

総括ということでお話ししてきました。本日の発表についてはこのようにまとめられるというのがそもそもの趣旨ですが、私の力量ではそもそもまとまるはずがないところを、強いて言えば、こういうふうになるかと述べてみました。

文献史学でも、やりようによってはどんどん問題を進行させていくことはできるけれども、それでもどうしても限界が生じやすい。古文字学という多分野にまたがる領域もありますが、同様です。言い古された言い方にもなりますが、考古発掘に期待するところは多大です。現在、進行中の調査においても、その期待にこたえる成果が次々にもたらされていることを再確認して、総括に変えたいと思います。

○角道 平勢先生、的確な総括をしていただき、大変ありがとうございました。

本日のシンポジウムは考古学の視点からということで、報告は基本的に全て考古学の角度からだったわけですが、平勢先生に今ご指摘いただいたとおり、秦の歴史を考えるとときには、当然ながら考古学だけでも文献のほうからだけではいけない。平勢先生は「痒いところに手が届かない」という表現をされておられましたけれども、その通りだと感じました。今の総括を伺いながら、われわれ考古学

の立場から研究をする人間は、ともすれば文献のつまみ食いをしてしまいがちであるということを戒めなければならないと、思いを新たにいたしました。

今後の秦文化への研究は、それぞれの立場から、あるいは複合的な視点から、進んでいくのだらうと思いますし、その点でも、多岐にわたる研究報告の総括をしてくださった平勢先生に改めて御礼申し上げます。平勢先生、総括いただきましてありがとうございました。

本日のプログラムとしては、以上となります。

最後に、閉会の言葉ということで、鈴木先生から閉会のご挨拶をいただければと思います。では、鈴木先生、お願いいたします。